酪農教育ファームは日本の酪農生産現場に定着した観があり、教育的な効果について各方面から高い評価を受けている。その一方で、認証牧場数はこの数年で約300にとどまっている。

酪農教育ファーム活動に取り組む酪農家の中には、〝食とい のちの教育〟を通じて、地域社会との関係を構築し、リーダー役として地域づくりを支える人もいる。

ここでは、「地域社会との関係」をキーワードに、酪農教育ファーム活動の今後を考える。

消費者に酪農や農家の実態を知ってほしい

大学生の受け入れにも長年取り組む

大分県杵築（きつき）市山香町　**たばた牧場**

大分県杵築市山香町の戦後開拓地、西鹿鳴越（にしかなごえ）地区にあるたばた牧場。同牧場の後継者田畑修一さん（34）は、筑波大学在学中に酪農教育ファーム活動の存在を知り、就農後にファシリテーター講習を受けた。

今では体験の受け入れだけではなく、地元の若手農業者が企画する消費者との交流祭や、各種体験行事への参加を通じて、生産者からの情報発信と地域との関係づくりを進めている。

牛舎で作業する田畑さんと宮崎さん

消費者との交流行事で酪農体験を提供

夏休み最終日の８月30日、別府市や杵築市、速見郡日出町の35歳以下の農業青年で構成する日出地域農業青年連絡協議会（青井朝輝会長）は、「平成27年度農業青年が贈る手づくり交流祭」を開催し、大分市や別府市の消費者約40人が参加。若手農業者との交流を楽しんだ。

農業青年と消費者との交流会は25年以上の歴史を持つ。田畑さんも就農と同時に協議会に入り、消費者と交流してきた。

交流祭当日のたばた牧場では、搾乳と哺乳体験が行われ、子どもたちの歓声が響き渡っていた。

搾乳体験は、田畑さんが牛の一生や牧場内での注意事項を説明した後スタート。母の陽子さん（63）や弟の大樹さん（33）と一緒に、子どもたちの体験をサポートした。

体験後は公民館に場所を移して、ソーセージやバター、アイスクリームづくりを行い、参加者は楽しいひとときを過ごした。

牧場体験を提供した田畑さんは地元の農業高校を経て1999年に筑波大学生物資源学類に入学。2003年に卒業後、自家で就農した。

たばた牧場は10年に認証牧場になったが、田畑さんと酪農教育ファーム活動との出会いは大学生の時にさかのぼる。「酪農教育ファームの存在を知り、これは良いものだと思った。そこで既に認証牧場になっていて大学から比較的近かった千葉県の須藤牧場や尾形牧場を見学したこともあった。先行事例を見て、卒業後すぐにうちの牧場も認証を取りたいと思った」

田畑さん一家。左から妻の綾子さん（34）と三男の真慧（まさと）くん（１）、修一さん、長男の昊飛（そらと）くん（６）、父の大治さん、二男の颯士（はやと）くん（４）、母の陽子さん

対価は支払ってほしいとの考えに立つ

たばた牧場では、地元の保育園児や小学生の牧場体験を受け入れるほか、地元杵築市内の大分農業文化公園で開かれる酪農体験イベントや、毎年10月に開かれる大分県農林水産祭にも大分県酪農協の一員として参加している。

体験活動を行うのは、畑仕事が比較的少ない８月から10月が中心。

牧場内で行うときの体験料は、１団体当たり１万円、さらに参加者１人当たり500円という価格設定にしている。

田畑さんは「対価は支払っ

地域社会との関係―酪農教育ファーム活動の今後

子どもに搾乳方法を説明する田畑さん、それをサポートする弟の大樹さんと宮崎さん(左)

2014年10月に開かれた大分県農林水産祭の大分県酪のブースで、バターづくり体験を指導する田畑さん。「1回の体験で最大150人を相手にしたこともあった。人が多いのは苦にならない」

搾乳時に使うミルカの構造を子どもたちに説明する田畑さん

牧場での注意事項について参加者に説明する田畑さん

てほしいという考え。今までの農業教育ではそういう意見はなかなか受け入れにくいところもあったが、教わるのだからお金を出すのは当たり前という感覚を消費者には持ってほしい」と説明する。

大学生に農家の実態を知る機会つくる

田畑さんは大学２年生の時から、出身校の筑波大学の学生をたばた牧場に受け入れている。

「大学には後継者がほとんどおらず、農業は知っていても農家の実態を知らない学生が多い。大学入学後、そのギャップに戸惑い、消費者と生産者との間に壁があるのを感じ、ズレを埋めたいと思っていた」

田畑さんは、のうりんむらという農業関係のサークルを立ち上げ、自ら初代村長(代表)に就任。春と夏の年２回、学生をたばた牧場に受け入れて、作業体験や農業に関する意見交換、地区の人との交流を通じて、酪農や農業の実態を知る機会をつくった。

たばた牧場では、今までに筑波大生約130人を受け入れた。学生は地元の公民館で９泊10日の集団生活を過ごす。「受け入れを始めてから、宿舎に使う公民館を改装した。地区の皆さんの理解があったからできたこと」

今年夏の合宿に参加した宮崎裕貴さん(24)は大阪府出身で、筑波大学大学院生命環境科学研究科の修士課程１年生。大学入学後初めての夏休みから合宿に参加してきた。「現場を見て、酪農家のしんどさと同時に農業の面白さも知ることができた」

今まで受け入れた学生は、筑波大生だけだったが、昨年冬に発足した地域交流牧場全国連絡会のクラブ・ユース事業に田畑さんが参加。そこで他大学の学生と知り合った縁もあり、今年夏、日本獣医生命科学大学の学生３人を受け入れた。今後は他大学の学生の受け入れも進める予定だ。

酪農や牧場の商品価値の高さに気付こう

田畑さんは酪農教育ファーム活動を通じて、生産者からの情報発信の必要性を痛感したという。「その場で食べられる野菜とは異なり、牛乳は製品になるまでに乳業メーカーを通す。消費者は製品になった牛乳しか目にしないが、牧場に来て初めて酪農と牛乳がつながる。酪農家も牛乳についてもっと勉強して、消費者に情報発信する必要があるのでは」

酪農教育ファーム活動の魅力については、乳製品加工とは違って設備投資がいらないことを挙げる。「いろいろな農業分野の中でも、酪農や牧場の商品価値は高いと思う。そこに酪農家が気付けば、消費者との距離はもっと縮まる。酪農教育ファームが徐々にでも、酪農家の中で浸透していけばいいと思う」と、酪農教育ファーム活動のさらなる拡大に期待を示す。 **【構成・斎藤　丈士】**

たばた牧場

たばた牧場は田畑さんの父大治さん(65)が、1979年に４頭導入して酪農を始めた。現在の飼養総数は61頭(うち経産牛45)。このほか40頭の黒毛和種を飼養する。14年の出荷乳量は380ｔ。

飼料畑12ha(借地込み)に加えて、牛舎の隣で和牛繁殖経営を営む弟の大樹さんと一緒に、イネホールクロップサイレージ、麦ワラ、稲ワラを耕畜連携で調達し、搾乳牛に給与する粗飼料は全て自給している。

牛舎作業は田畑さん、大治さん、陽子さん、綾子さんの４人で行っている。

認証までの手順(平成27年度スケジュール)

認証牧場	書類提出	現地審査	書類審査 12月	牧場認証
ファシリテーター	書類提出	書類審査 12月	認証研修会 1～2月	ファシリテーター認証

※認証牧場は「場」、ファシリテーターは「人」の認証です。両方合わせて認証ができますし、ファシリテーターのみの認証も可能です

お申し込み方法	認証牧場認証申請書、ファシリテーター認証申請書に必要事項をご記入の上、お申し込みください。 ※申請書類に関しては、酪農教育ファームホームページからダウンロードしていただくか、事務局までお問い合わせください

認証研修会(予定) ―― 1泊2日 ――	会場 日時	札幌	東京	福岡
		平成28年1月14、15日	平成28年1月28、29日	平成28年2月18、19日

認証制度に関して詳しく知りたい方は、(一社)中央酪農会議業務部(寺田、草間)にお問い合わせください。

(一社)中央酪農会議　〒101－0044　東京都千代田区鍛冶町２－６－１　堀内ビルディング4階
TEL:03－6688－9841　FAX:03－6681－5295
http://www.dairy.co.jp/edf/